
神様に希望なんかをもってはいけない

リベリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様に希望なんかをもってはいけない

【Nコード】

N9928P

【作者名】

リベリオン

【あらすじ】

この国のお城の地下にある神殿には神様がいて、神様に選ばれた人間は一つだけどんな願いも叶えてもらえる、そんな言い伝えがあります。

そんな言い伝えがある世界の小さな村に暮らしている二人の少年と一人の少女の数奇な運命を描くダークファンタジーが今はじまる

第一話 大切な日常（前書き）

はじめまして、今回の作品が初めての投稿であり処女作です。

つたない文ではありますが最後までお付き合い頂けたら嬉しいです。
短編の予定ですので5話ほどで完結の予定です。

では私の初めての小説をお楽しみ下さい。

第一話 大切な日常

この国のお城の地下にある神殿には神様がいて、神様に選ばれた人間は一つだけどんな願いでも叶えてもらえる、そういう言い伝えがあった。

今俺の目の前に神様がいる！とても神秘的な女神様だ！でも俺は神様に選ばれた覚えなんかないぞ、良いのか？

俺は驚きのあまり硬直するが、この理解できない状況をどうにか把握しようとして頭をフル回転させる。
だが神様は俺を気にせずに喋りだす。

「リック、そなたの願いは何ですか？言ってみなさい」

えっ、俺が選ばれた？遂に俺が選ばれた！？なら、俺の願いはただ一つだ！

「俺の願いは、俺とアリアをけっこ…」

パンツ！！！！

俺が言葉を言い終える前に大きな音が響き、目の前が真っ暗になった。残ったのは側頭部にある痛みだけ、そして目を開けると…

「痛っー！！」

「授業中に居眠りとは良い度胸だな、どうせノートは白紙なんだからそんなんじゃ先生が困るんだよ」

学術所の教師のグレッグだ。こいつは自分が気にいらぬ生徒はとことん差別する嫌な奴だ。

コイツ教科書で叩きやがった。

面倒だから俺はあらかじめノートに書いてあった解答を見せて

「勉強はちゃんとやってます。それでも困りますか？」

と皮肉を言い返す。

「ぐっ…」

悔しがって歪むグレッグの表情は醜いっただらありやしね

「まあいい、授業を再開するぞ」

勝ち目が無いと判り授業へ逃げるグレッグ、その後ろ姿を見て皆が笑ってる

なんでかって？グレッグのワイシャツが汗でビショリだからだ

「もう、ダメよ先生にあんなこと言っちゃ、それにしっかり授業を受けなきゃ」

隣の席に座っているアリアに注意された

「何を言ったって無駄だよアリア、リックの生意気さと面倒くさがりは治らないよ」

それを諦めるように促すクレイ

この二人、アリアとクレイは俺の幼馴染みだ。

アリアは俺達より一つ歳が上の19才、真面目過ぎるカタブツ女だ。でもたまに女っぽい可愛いところもあるけど、それは置いとく。

でクレイは俺と同年の18才、文武両道の秀才で俺の親友だ。

これまた何でもしつかりやる真面目な奴だが、話の分かる良い奴だ。だから俺の親友でいられるんだな。

んっ？さっきから喋ってるお前は誰かって？

忘れるとこだったぜ。俺はリック、この物語の主人公だぜ！

…ヤベっ、調子に乗ると作者に殺されるゝ

…分かりました、ちゃんと説明して終わります。

俺、リックは勉強が大嫌いで上から目線の奴が大嫌いな18才だ

さて俺の紹介が終わったところでこの物語の舞台を紹介しよう。

俺達が暮らしているのは、ペルミアとよばれる田舎の村だ。

田舎のイメージ通りで主に農業が盛んだ。

そして神様の言い伝えのあるお城、プリンデル城はペルミアからかなり遠い場所にある。

ペルミアを出て森を通り抜け、山を越え、溪谷を抜けた先にある。

ペルミアからプリンデル城に着くまでに早くても歩いて二週間はかかる距離だ。

この物語の舞台は俺達が暮らしているペルミア村とプリンデル城、そしてその二つをつなぐ道になる森、山、溪谷だ。

さあ紹介はこんなところだ、物語を再開しよう

「クレイは分かっているな、流石は俺の親友だ」

「誇るところじゃないでしょ！クレイもちゃんと注意してよ」

「意味ないよ、これがリックなんだから」

完全にアリアの一人相撲だ

「もうっ、だからリックが調子に乗るんだよ！」

アリアが我慢できなくなって声を大きくした

「そこ、うるさいぞ！」

グレッジに大声で注意をされた

注意した理由はうるさいだけじゃなくて俺に対するせめてもの反撃だ
まっ、気にしねーけど

『す、すいません』

アリアとクレイが謝ってる

「なんでリックは謝らないの？」

アリアの疑問に俺は

「だって今のはアリアの声がデカかったから注意されたんだろ、な

「俺は謝る必要ないじゃん、それに俺はあいつのこと嫌いだし」
思ったままに話す

「まあまあ、そうやって言い合つてるとまた注意されるから静かに
しよ」

クレイになだめられてこの会話は落ち着いた
アリアとクレイは勉強に戻り黒板に意識を向ける

もちろん俺は勉強をするつもりなんかサラサラない
俺は窓の外の景色を見る、のどかな村の風景が見えるがそれは俺に
変わりばえのしない空しい景色にしか見えなかった

だんだん瞼が重くなつてきて、遂には意識が途絶えた。

意識を取り戻した時にはすでに授業は終わっていてグレッグが教室
から出ていくところだった。

「アリア、後で学長のところに行け、話がある」

グレッグが教室を出る前にアリアに言った。

「分かりました、すぐに行きます」

アリアがしっかりと答えるとグレッグはニヤニヤしていた

「グレッグの奴、俺のことは大嫌いでアリアのことは気に入ってる
よな、差別してんのが丸分かりだよ」

「もしかして神様に選ばれたのかな!？」

クレイは俺の言葉を掻き消すほどの声でアリアに聞いた
その声は

「そうなのかな？」

「まあ、優等生のアリアなら選ばれてもおかしくないだろ」

当の本人に自覚はないらしいが、こういう意味でも無垢な方が神様に選ばれるのかなと俺は思った。

アリアが呼び出された理由を知らずに盛り上った。

「そうだ、あたし学長のところにいかなきゃ!行ってくるね」

アリアが教室を出て行く。

「そういえば、優等生なら選ばれておかしくないって思うならなんでリックは真面目に勉強しないんだ?お前は頭も良いし、態度や気構えさえ変えればトップになれるのに」

今回はさすがに気になったのかクレイが聞いてきた

「俺は神様にすぐることなんか無いよ、あるとしたらこの変わることのない日常を刺激的にして欲しいよ」

と俺はありのままの考えを話す。

「この手の話のときはいつもそう言うな、なんでだ?」

今日はやけに食いつくなあ、なんでだ？

「この村での生活が物足りないんだ、なんか満たされないっていうか・・・心の渴きつて言うのか、ああーなんつつか、もっと違う生き方をしたいんだよ！」

少し苛ついてしまい、声を荒げて返した。

「い、ごめん」

すぐにクレイが謝る。

「いやこつちこそごめん、気にしないでくれ」

悪いと思ってクレイに謝った。

「にしてもアリア遅いな」

「そうだね、でも鞆はここにあるから戻ってくるだろし・・・」

俺とクレイが話始めた矢先にアリアが走って戻ってきた、その表情は驚きながらもとても嬉しそうだった。

「遅いぞアリア、どんだけ待ったと・・・」

「あたしが神様に選ばれたの！明日の朝にお城に向かうって！！」
俺の言葉がまたも遮られた、っていうかアリア今なんて言った？

「本当かい！おめでとう！」

「ありがとうクレイ！…どうしたのリック？喜んでくれないの？」

俺はあまりの衝激で硬直していた。

「リック？リック！」

アリアの言葉を聞いて我に返る。

「ごめんびつくりして固まってた、おめでとうアリア」

この時、俺には何か違和感があった。

でもそれは俺と親しい人が神様に選ばれたのが羨ましかったのかも
しれない、そう思った。

だがこの出来事が俺達3人の人生を狂わせることになることを今は
まだ知らない。

第一話 大切な日常（後書き）

いかがだったでしょうか？

説明文が下手なものでト書きを主人公のモノローグで進めていきま
した。

感想の方お待ちしていますのでよろしく願います。

では今回の作品にお付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9928p/>

神様に希望なんかをもってはいけない

2011年1月12日22時47分発行